

風俗画報に見る明治43年東京大洪水 ～水害のこわさを知る～

安達 實¹・村田 晶²・宮島昌克³

¹正会員 金沢工業大学客員研究員（〒921-8501 石川県野々市市扇が丘7-1）

E-mail:adachi.makoto@ruby.plala.or.jp

²正会員 金沢大学助教 理工研究域環境デザイン学系（〒920-1192 石川県金沢市角間町）

E-mail:murata@se.kanazawa-u.ac.jp

³正会員 金沢大学教授 理工研究域環境デザイン学系（〒920-1192 石川県金沢市角間町）

E-mail:miyajima@se.kanazawa-u.ac.jp

明治維新以降、東京に人々が集まるにつれて水害は深刻になっていった。明治の後半になると洪水被害はより大きくなったが、当時の新聞は写真が少なく、後日発行された画報などでその様子を知るしかなかった。気象災害を防ぐには、気象知識を学び、防災知識を高めるとともに、過去の災害の状況を知ることが重要と思い、明治期最大の大水害になった1910（明治43）年の東京大水害を絵や写真でその一部を報告し、今後の防災・減災につながることを願いたい。

Key Words：明治期、風俗画報、東京大洪水

1. 明治期の東京の洪水

あらゆる面で、大変革をとげた明治期ではあったが、自然災害が多発し、多くの犠牲者が出ている。1875（明治8）年に東京気象台が設立されて系統的な気象観測が始められたが、情報伝達手段もまだ十分とはいえず、治水対策も遅れていたため大雨ごとに水害が発生した。

明治末期には1907（明治40）年8月の関東地方の、1910（明治43）年8月関東および東北地方南部の水害がそれぞれあり、なかでも明治43年8月の梅雨前線活動と台風による豪雨では関東平野が一面の泥海と化し、東京の下町も水浸しになるなど、関東地方では明治期最大の水害となった。本稿では明治43年の大水害を取り上げる。

1910（明治43）年は、梅雨明けが遅れて8月上旬関東から中部地方の南方海上に梅雨前線が停滞してい

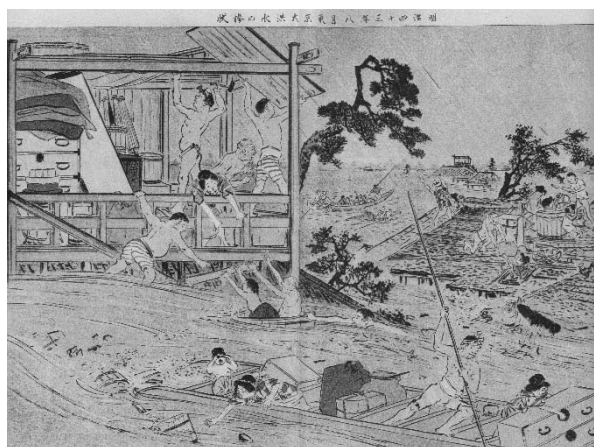
たところへ台風の通過の影響で関東地方から静岡県にかけて大雨が降り続き、7日から11日までの5日間の雨量は山岳部で300～700mm、平野部でも200～500mmに達した。関東地方では各河川が急激に水量を増し、六郷川・利根川・荒川をはじめ大小の河川が氾濫して堤防の決壊が相次いだ。この時の全国の死者・行方不明者合計は1,359人、浸水家屋は約518,000戸にのぼる激甚災害が発生した。

東京大洪水によるその後の対応として荒川を取り上げる。過去荒川が江戸・東京を襲った洪水は数えきれない。隅田川は荒川の流れを引受け、水害苦難の歴史を繰り返してきた。1910（明治43）年の大水害は、改修工事（荒川放水路）を決断させ、翌1911年に用地買収が始まり、1913（大正2）年から本格的に着工し、1930（昭和5）年に完成し、この放水路の完成以後、東京下町の堤防決壊による水害は皆無となった^{1)～6)}。

2. 風俗画報の絵に見る明治43年東京大洪水

文明開化後の1889（明治22）年に風俗画報が創刊され、濃尾地震や三陸大海嘯などの自然災害に関しては特集号が刊行され、絵画が伝える悲慘な状況を伝えることで売れ行きを伸ばしていた。この画報はその後写真が中心となり大正期には廃刊となったが、現在歴史的な出来事を伝える重要な文献となっている。今回は東京大水害特集号の風俗画報412号、413号の中から数点紹介する^{7）、8）}が、自然災害に対する市民の生きる迫力がうかがえる。

図－1は明治43年東京大洪水の惨状で、盥に乗った老人を救う絵である。洪水の流速の流速が早いことが窺える。図－2は下谷区山伏山小学校への避難民収容で、まずは老人、病人、子供を校舎へ収容している様子が描かれている。図－3は回向院（東京都墨田区両国）での僧と兵の入り乱れての炊き出しで、陸軍が救援に参加していることがわかる。図－4は向島堤上の仮小屋である。現代における仮設住宅のようなものである。図－5は押し入れでの生活であるが、出水中であるので避難中という状況であろう。水位は男性の肩くらいまで（1.2m程度）あるようだが、水流はそれほどでもないようである。図－6は避難所での出産である。産婆が立ち会っているかは不明であるが、避難民が助け合っている状況を窺える。



図－1 明治43年東京大洪水の惨状



図－2 下谷区山伏山小学校 避難民収容



図－3 僧と兵の入り乱れての炊き出し



図－4 向島堤上の仮小屋



図－５ 押し入れでの生活



図－６ 避難所での出産

3. 写真に見る43年大洪水

明治後半になると、かなり写真が普及してきたが新聞や雑誌ではまだ少なく、大水害のあった明治43年の新聞記事は下図のようである。図－7は明治43年8月1日東京朝日新聞記事で、六郷川の氾濫についてである。また、図－8は明治43年8月13日の東京朝日新聞記事で、向島の堤防決壊、浜町河岸の氾濫についてである。両図に示すように写真は少なく、図－7の紙面では水害の写真1枚、図－8では3枚が掲載されているが、いずれも鮮明でない。

次に、日本災害史 3 気象に載せられている³⁾ 雑誌や書籍に残る写真をいくつか紹介する^{4)、9)}。図－9は浅草我妻橋付近の浸水状況である。背後に写っている建物はサッポロビール工場である。図－10は避難場所となった蔵前国技館館内の状況写真である。避難民8千人を収容したとのことである。土俵が入浴所となってい



図－7 東京朝日新聞（明治43年8月11日）



図－8 東京朝日新聞（明治43年8月13日）



図－9 浅草我妻橋付近の浸水状況



図－10 避難場所となった蔵前国技館



図ー 1 1 浸水した向島新小梅町



図ー 1 2 向島牛嶋神社境内

るのが、現代の感覚では考えられない。図ー 1 1 は浸水した向島新小梅町の写真である。水位は70cm程度であろう。流速はそれほどでない。小型の舟が多数写っているのは、河川と水路に囲まれているこの土地ならではの。図ー 1 2 は向島牛嶋神社（現 隅田公園内）境内の様子である。水位は50cmであろう。当時は言問橋は架橋されておらず、写真の場所は竹屋の渡し付近であることから、渡船に携わっている人が救援に活躍しているであろう。

4. おわりに

地球温暖化に伴う気候変動により、水害や土砂災害の頻発化、激甚化が懸念されている。これらに対処するた

め、水防災意識社会再構築が必要であり、コンピュータがすべての作業をしてくれると思うほかに、過去の洪水のこわさを知ること重要であり、これによって防災知識を臨機応変に向上させ、災害に備えたいと思っている。

この災害で国技館が8千人を収容したことを知り、災害の多い日本での大型公共建物の重要性を感じた。この水害時では、石川県の前身・加賀藩主の前田家が東京府へ一万円寄付し、加えて一千枚の大天幕を隅田川堤上に張ったという。この時日本銀行が二万円、第一銀行が一万円寄付したとあることから、大きな美舉となっていることは石川県民の誇りである。

なお、本文をまとめるにあたり、大学、石川県、県歴史博物館などの方々からご協力いただきました。記して厚くお礼申し上げます。

参考文献

- 1) 東京市：東京市史稿 変災編第三, pp.454-459, 1916.
- 2) 東京都：東京百年史 第三巻, pp.740-748, 1972.
- 3) 下鶴大輔, 他：日本災害史 3 気象, 日本図書センター, pp.22-26, pp.172-177, 2001.
- 4) 竹田厚, 他：日本の自然災害, 国会資料編纂会, pp.114-117, pp.448-451, 1998.
- 5) 平凡社地方編集センター：東京都の地名, 平凡社, pp.51-63, 2002.
- 6) 平野敏右, 他：環境災害事故の事典, 丸善, p.827, 2001.
- 7) 風俗画報 第4 1 2号水害号, 東陽堂, 1896.
- 8) 風俗画報 第4 1 3号水害号, 東陽堂, 1896.
- 9) 朝日新聞復刻版 明治編 第Ⅲ期, 日本図書センター, 2001.
- 10) 国土交通省編：国土交通白書 2 0 1 6, 日経印刷, pp.258-261, 2016.
- 11) 内閣府：平成 2 8 年版 防災白書, 日経印刷, pp.63-65, 2016.
- 12) 土木学会：土木工学ハンドブック, 技報堂出版, pp.1802-1803, 1990.

(2017. 4. 10 受付)